

令和 3 年 6 月 14 日現在

機関番号：14301

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2020

課題番号：19K13086

研究課題名（和文）書に関する説話資料の総合的研究

研究課題名（英文）General research on narrative texts about calligraphy

研究代表者

成田 健太郎（Narita, Kentaro）

京都大学・文学研究科・准教授

研究者番号：20770506

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,000,000円

研究成果の概要（和文）：中国古典学の研究手法によって、今日も書の名人として尊重される王羲之あるいはその書跡を文化的に価値づけてきた言説に批判を加えた。第一に、王羲之は衛夫人という女性に師事したことがあると伝える文献資料を精査し、そのような伝承の成立過程について仮説を提示した。第二に、王羲之の代表作『蘭亭』の履歴を伝える唐の著作『蘭亭記』を伝奇テキストとして分析し、そのユニークな点を指摘した。第三に、王羲之の代表作『蘭亭』をめぐって唐から宋にかけて交わされた種々の伝承について、書跡としての流通・伝播の様態と対比しつつ考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の成果はいずれも、今日も書の名人として尊重される王羲之あるいはその書跡を文化的に価値づけてきた言説に厳しい批判を加え、その延長線上にある我々の価値観に対しても捉え直しを迫るものである。また、それを中国古典学の手堅い研究手法によって遂行した点に高い価値を認めうる。

研究成果の概要（英文）：The researcher criticizes by the method of sinology the discourses that added value to Wang Xizhi, who is still respected as a legendary calligrapher and his calligraphic, and his calligraphic works.

研究分野：中国古典学

キーワード：王羲之 衛夫人 蘭亭 何延之 蘭亭記 墨跡本 刻石本 定武本

1. 研究開始当初の背景

書に関する歴史上の言説は、しばしば「書論」と総称される。そのなかでも書に対する専門的知見をつづった著作、すなわち書学著作に対しては、近代以降に基礎的な研究が加えられ、国内においては『中国書論大系』(二玄社、1977-)を代表的成果とする。本研究の研究代表者は、書論のなかでも、主に書学著作を対象としてさらなる研究を進めてきたが、歴史的な書学著作のなかに、まま説話的言説が含まれることにも注意を払ってきた。従来の書論研究は、書道史上の事実解明を第一の目的とし、説話というメディアの特性には十分に注意せず、また、王羲之や「蘭亭」「千字文」など、主要な作者や作品については関連する説話的言説が個別に検討され、説話というメディアの特性に起因する問題点も指摘されてきたが、しかし全体としては、書に関する言説のなかから説話を抽出してなされた考察はひじょうに稀であった。以上のように従来の書論研究において見過ごされてきた部分に、異なる角度から光を当てる必要性を痛感したことが、本研究の出発点となっている。

2. 研究の目的

まずそもそもの問いとして、書という芸術の本質は何かということがある。書は、知識人によって専有された技能であり、読まれることを前提とするため、本来的には個別性よりも共通性が重要である。つまり、書は本来際だった個性を獲得しにくく、芸術として成立するうえで不利な条件を抱えている。そのような条件にかかわらず、王羲之といった著名な能書家の書が名声を博した要因の一つとして、言説によるサポートがある。そして言説のなかでも、本研究が対象とした説話的言説は、より広汎な社会階層への書文化の普及を後押しするものであり、本研究の目的は、書が説話的言説によって人々に開かれた芸術として成立したことを実証することにあるといえる。また、いま一つの問いとして、説話において書という存在はどのように機能したかということがある。書という異なる芸術様式を内包した説話にはどのような特徴が生じたか、説話研究の文脈から明らかにすることも、本研究の目的となっている。

具体的には、書に関わる説話的言説を異なる領域の文献資料から抽出し、その範囲と概念を確定するとともに、説話が書をどのように発展させたか、また説話において書はどのような役割を果たしたか、総合的に考察して明らかにする。たとえば、東晋の王羲之などに代表される著名な能書家が、どのようにしてその技能を修得し、どのように芸術作品としての書を具体化したかということは、現代の学問においても中心的課題となりうる。本研究では、想像力の具体化形式の一つである説話というメディアがこのような問いに対して提示した解答を読み解き、書と説話の本質の一斑を把握する。また、王羲之の書からは「千字文」という書の手本も複製され、ばらばらになった王羲之の筆跡を韻文に整え直した周興嗣が一夜にして白髪になったとか、智永は「千字文」の臨書によって名声を博し、客人が門の敷居を踏みつけて傷めるので鉄板で補強したとかいう説話が知られている。これらの説話は、初学者を書道に親しませる目的では現在もよく引用されているが、学術的研究の対象からは除外される傾向があった。その理由は、ひとえに説話を取り扱う方法論が定まっていないからであり、本研究はその空白を埋める試みである。たとえば、東晋の王羲之が書において名声を獲得したというストーリーは、決して目新しいものではないが、その裏づけとなっている説話的言説を精査することで、そのようなストーリーを無批判に受容してきた私たちの認識を揺り動かすことを、本研究では主たる目標としている。

3. 研究の方法

まず、書に関する説話的言説を文献資料から収集した。ただし、書に関する説話的言説の範囲は研究開始時点では定まっていなかったため、まずはより広く収集し、有意義な概念設定が固まるにつれて範囲を狭める手順を取った。対象となる文献資料は膨大であるため、説話的言説の収集に先行研究を利用した。具体的には、馬宗霍『書林紀事』(商務印書館、1935)に主要な言説が整理されており、大きな指針となるが、そこからそれぞれの説話の原典を確かめ、さらに遺漏や変種をも調査した。これと同時に、説話の特徴を分析し、多くの言説を具体的な作者や作品に沿って整理するだけでなく、固有名詞の異同を捨象して、説話類型によって把握することも行った。

そしてまず、書道史研究の成果に照らして、説話における作者や作品の描かれ方が事実として妥当か

どうか検討した。この検討に際しては、説話を含まない歴史資料をも精査し比較考究した。また、説話に登場する作品について、伝世作品との照合を行った。伝世作品に説話の内容と一致する特徴が見いだせるかどうかによって、説話が成立した時点における作品の受容状況や、説話の普及の度合いを考察した。以上のような基礎的考察に基づいて、書に関する説話的言説を研究対象として定位した。具体的には、説話において語るに値するとされている出来事の基本的要件、典型的なストーリーやプロット、書が登場する必然性について一定の結論を見出した。

本研究の期間内に、以上のような考察をあらゆる書に関する説話的言説について行い、かつそれを論文として完成するのはそもそも難しいので、研究成果を論文として発表するにあたっては、以下の中国史上最も名高い能書家といってよい東晋の王羲之とその作品を対象を絞って論述し、以下のような研究成果を論文として国内外の媒体に発表した。

4. 研究成果

能書家として名高い王羲之には、幼時に衛夫人という女性に師事したことがあるとする伝承があるが、本研究では第一に、そのような伝承を載せる文献資料を精査した。具体的には王羲之が自ら記したとされる「題筆陣図後」や、同書に収める南朝の著「古來能書人名」に両人の師承関係が言われ、それらの記述は唐の代表的な書論「書断」に受け継がれた後、唐末に編纂された『法書要録』に収められ、従来常識として黙認されてきた。本研究ではさらに、唐の杜甫の詩における言及を対象に加え、そのような伝承の成立過程として、唐の中葉ごろ、すなわち衛夫人・王羲之の在世当時から三世紀以上経過してから、両人の師承関係が通俗的な伝説として発生し、唐を代表する書論『書断』に採用され、さらに唐末の『法書要録』に至って、テキストとしても強固に固定されたという仮説を提示した。この仮説は従来常識と大きく異なり、インパクトの大きい成果といえる。

第二には、唐の何延之の著として伝えられ、王羲之の代表作『蘭亭』の真跡本の履歴を伝える『蘭亭記』を、唐代にジャンルとして成立したとされる伝奇テキストの一つとして分析した。『蘭亭記』は、個別の器物を主題とし、その固有名と「記」の組み合わせをタイトルとする点が独特で、そのようなテキストが実現した環境として、出来事を叙述する「伝」と「記」の存在、なかでも漢訳仏典の写本を主題とした「記」の存在、そして伝奇テキスト『古鏡記』の存在が注目される。また、『蘭亭記』は異なる物語を書跡の名の下に包摂した伝奇テキストであるといえる。従来の研究では、書論に伝奇テキストとしての側面を認めるアプローチは少なく、本研究では、伝奇テキストに対する文体論的考察を踏まえてという大きな文学史的背景を踏まえて今後の研究はそのような構造への理解を前提として進められることが望まれる。

第三に、王羲之の代表作『蘭亭』をめぐる唐から宋にかけて交わされた種々の伝承について考察した。『蘭亭』は、唐代に墨跡本が、また宋代には定武本をはじめとする刻石本が流布し、文献資料に徴すると、いずれの時代にも市中において自発的に『蘭亭』の諸本が生産され流通した状況があり、特に宋代にはそのような状況に士大夫階層が主体的に関わっていたことが知られる。しかし言説としては、『蘭亭』は皇帝の専有から偶然に流出したものとしてしばしば語られ、想定される状況と一致しないところがある。ただしそのような言説も、墨跡本・刻石本に共通する出現から消失に至る循環、あるいは唐と宋の時代相の差異といった点において高い参照価値を有する。

以上の研究成果はいずれも、今日も書の名人として尊重される王羲之あるいはその書跡を文化的に価値づけてきた言説に厳しい批判を加え、その延長線上にある我々の価値観に対しても捉え直しを迫るものである。また、それを中国古典学の手堅い研究手法によって遂行した点に高い価値を認めうる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 成田健太郎	4. 巻 55(1)
2. 論文標題 固有名をもつ器物の一代記：『蘭亭記』をめぐって	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 埼玉大学紀要(教養学部)	6. 最初と最後の頁 237-245
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24561/00018742	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 成田健太郎
2. 発表標題 王羲之と衛夫人の師承関係について
3. 学会等名 書論研究会第41回大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------